



TOP > インタビュー > 教授・卒業生の声

教授・卒業生の声

教授・卒業生の声

院生の声

純粋で科学的な探究を通じて研ぎ澄まされる知性と感性こそが、人生を豊かにする**小野 晃典 商学部准教授(商学研究科委員)****■ 小野准教授の研究テーマをお聞かせください。**

いくつかの研究プロジェクトに同時に取り組んでいますが、いま最も関心を持って取り組んでいるのは、マス・カスタマイゼーションを巡るマーケティングと消費者行動についての研究です。

自動車、スーツやシャツ、あるいはパソコンなどの産業で周知のように、昨今の技術革新を背景にして、消費者のオーダーを受けてから製品を提供するマス・カスタマイゼーション・システムが、以前より安価かつ迅速に実現できるようになってきています。顧客のニーズを満たすため製品差別化を行うべきことが古くから言われてきたわけですが、マス・カスタマイゼーションは、無限とも言えるバラエティを提供することで細かな顧客ニーズに対応すると共に、見込み生産による不良在庫のリスクを回避できる点で、究極的な製品差別化が可能な将来を示唆しています。

私は大学院生時代から現在に至るまで、製品差別化を巡る企業のマーケティング活動と、それと対を成す消費者のブランド選択行動についての理論的・実証的研究を行ってきましたが、マス・カスタマイゼーション技術によって無限の製品差別化が実現した近未来の社会では、マーケティングと消費者行動は従来のそれとは全く異なるものになる可能性があります。その点に注目して研究に取り組んでいます。



▲TOP

■ なぜ大学院へ進学されたのですか？理由やきっかけをお聞かせください。

私の大学院進学理由は非常に単純です。商学部生時代、マーケティング研究がただ楽しかったからです。授業が非常に面白かったので、3年生に進級するとき名門ゼミの1つに入会を志願させていただいた時点で、すでに大学院進学を視野に入れていました。ゼミ活動を通じてその気持ちはさらに募り、大学卒業と同時に大学院に進学しました。なお、今でいう「AO選抜入試」を活用し、筆記試験を免除していただきました。

けれども、進学に躊躇がなかったわけではありません。周りを見渡せば、大学院へ進学することなく一般企業に就職していく仲間が大半でした。当時はバブル崩壊後の不況の真っただ中で、今と同じく就職の難しい時期でしたが、そんな時期でさえ、大学院進学を少しでも考慮に入れている同期生は希少でした。それに影響されて私の気持ちは揺らぎました。

そんな気持ちを知ってか知らずか、ゼミの恩師は、就職活動時期に私を含む数名のゼミ生を集め、大学院進学を勧めてくださいました。君たちならば入試合格も容易だろうし、大学院でも楽しく研究に打ち込めるだろうから、進学を考えてはどうか、とお声を掛けてくださったのです。

さらに、他大学でご活躍中のOBの方々にお話を伺う機会にも恵まれました。マーケティング論の知識は企業での実践を通じて蓄積される気がするけれど大学院生や学者が開発していけるのかとか、企業に就職しても社長になれない人が大半だけど大学院に進学すると必ず大学教授になれるのか、といった何とも素朴な不安を質問としてぶつけると、先輩方はいとも簡単に回答してくださり、不安が和らぎました。

このように、恩師や先輩方に後押しされながら、大学院入試を受験する決意が固まっていきました。

▲TOP

■ 今振り返ると、一度社会人経験を積んでから進学した方が良かったという思いはありますか？

いいえ、ありません。マーケティング論を含む商学部を構成する諸学科は、社会現象を対象とする学問ですから、それを扱う学者や学生には、社会との対話が欠かせません。そうした社会との対話は、一般企業で働く代わりになるどころか、それを上回る経験ともなりえます。ですから、就職せずに進学したことに後悔はありませんし、一般企業の一社員として働いた経験がないために自分は社会を知らないと考えたことはありません。

実際、もし大学院生が社会経験を積みたければ、企業訪問して社員にインタビューを行ったり、消費者を対象にして調査を行ったりすればよいはずで、インターンシップの機会もあります。海外留学の機会も豊富です。そうした社会との自由な対話を通じて、大学院生は、社会現象に関する自分の見方は正しそうだとか間違っていないのだといったことを確かめたり、あるいは、新たな見方を発見するきっかけにしたりすることができるのです。

それに対して、一般企業の一社員には、社会との自由な対話が可能でしょうか。日常業務に忙殺されて、広範かつ複雑な社会現象を深く読み解く機会に恵まれないかもしれませんし、基本的な概念枠組や最先端の学説を知らないために、身近な体験さえ科学的視点で分析することができないかもしれません。ですから、大学院で学ぶことなく社会人になるということは、逆に、社会を知る機会を逸することのようにさえ感じます。

大学院進学を思案中の塾生諸君には、その点については迷いなく大学院に進学していただきたいですし、大学院進学を思案中の社会人の皆さんにも、現在の実務経験がその後の進路にとって特に有用でないのであれば、すぐに大学院入試に挑戦してもよいのではないかと思います。

■ 大学院進学後、母校である慶應義塾で教職に就かれた経緯をお聞かせください。

私は、修士2年生のとき、早めに書き上げた修士論文を審査対象論文にして塾内で就職活動に臨み、修士課程を終えるのと同時に「商学部助手(現「助教」)」として塾に奉職する機会に恵まれました。博士課程の3年間を、大学院生と大学教員の2つの身分を持ちつつ過ごせたのです。博士課程への進学に際して入試と学費を免除していただきましたし、授業担当がないにもかかわらず、一般企業で働く同世代の社員が得る給料に匹敵する額の給料と、先生方と同じビル同じフロアの研究室とを頂きました。

大学院生として、一般企業に勤める同世代の人たちに比べて長く学生生活を送っていると、どうしても将来の就職のことが不安になります。大学院進学を思案中の皆さんのなかにも、研究は好きだけでも、将来の就職が不安だという方が多いのではないかと思います。それは、私を含めて、おそらく全ての大学院進学者が感じたことのある共通の不安です。その不安を上回るほど「知」への思いが強いからこそ、私たちは大学院に進学するわけですが、大学側も実は、助教のポストや、ご質問から逸れますが学部生より充実した奨学金制度を用意して、大学院生たちの不安を和らげてくれているのです。

■ その後、先生は教わる側から教える側へ回って、現在、大学院で指導されているわけですね。

はい。私は研究が好きで大学院に進学したわけですが、博士課程を終えると、当然ながら、研究だけでなく教育を任されるようになりました。どうやって教育すればよいのか見当もつかなかった新米教師だった私も、教え子たちとの交流を通じて、すぐに自信を持って教育に携わっていけるようになっていきました。その模様については、「新米教師」という表題のエッセイを、『三色旗』(第643号)から頂いた依頼に応じて寄稿した思い出があります。その後、ほどなくして大学院でも授業担当を行うようになり、2009年度からは、大学院生たちの指導教授も担当するようになりました。

私は教育に携わる一方、現役の研究者として研究にも情熱をもって日々取り組んでいるわけですが、以前エッセイにも書いたとおり、そんな教員の姿を見ながらその傍らで過ごすうちに、慶應義塾の塾生たちは、興味深いテーマを見つけて自らの研究に情熱を注ぐようになってくれます。そうして彼らが学者顔負けの鋭い視点で社会現象に切り込めば、教員は一層、自分の研究に熱中すると共に、彼らの論文の指導に対しても高く関与しようとする。そうなると、塾生たちは一層、高水準の論文を執筆できるようになります。いま私が体験しているこの好循環は、これまで150年の長い歴史の中で、義塾が緊密な人間関係を築きつつ、優れたアウトプットを生み出してきた源泉の1つなのではないかと、私なりに感じているところです。

■ 自分の進路・将来と向き合う学部生に対してメッセージをお願いします。

たとえば商学部の各ゼミの三田祭研究を見てまわると、学部3年生が書いた論文とは思えない高水準の論文も多く、もし英語に翻訳して海外に投稿すればアクセプトされて、学者に混じって学会発表の機会を得ることも可能なのではないかと感じます。そうした論文の著者たちが卒業後の進路を考えると、大学院への進学を考慮にも入れないとしたら、非常にもったいない気がします。

実際、ひときわ分析視角が鋭かったり活き活きと論文を書いたりしている研究者タイプの塾生をよく見かけますし、同期や後輩に対してプレゼンを行うときに教えるのが非常に上手でわかりやすい教育者タイプの塾生も見かけます。1人や2人ではなく、大勢います。そうした塾生諸君には特に、自分自身の適職という点でも、日本の高等教育の高度化という点でも、大学院への進学を考慮に入れてほしいと思います。

さらに、将来的に一般企業で活躍したいと心に決めている塾生諸君のなかにも、大学院に進学すべきタイプがいます。つまり、日本のビジネス系学部での高学歴化は欧米に比べて未だ進展していないようにも見えますが、学部卒より大学院卒の方が有利な職種や業種は確実にありますので、それを見極めて進学を検討すべきだということです。

最後に、すでに大学院進学を検討し始めている皆さんには、指導教授に早期に相談することをおすすめします。進学に関して悩みを打ち明けければ適切に回答して下さるでしょうし、指導下の大学院生や若手研究者に対する「OB訪問」をセッティングして下さるかもしれません。また、もし学部時代から進学を前提とした指導を受ければ、進学後に有利なはずで、そうした活動を通じて、大学院進学への情熱と自信を高め、逆に不安を解消した上で、進学の決意を固めてもらえればと思います。

■ 他大学から慶應義塾大学大学院への進学を検討されている方にもメッセージをお願いします。

私自身、多くの他大学の学生さんや卒業生の方々から、大学院進学相談を受けます。入試前に受験生と接触することを好まない先生もおられるでしょうし、私も面接試験を含む入試にかかわるご相談には一切応じられません。ですが、卒業論文や研究計画書を提出しつつ、そうした方向性の研究が私の指導可能領域に合致しているかどうかという相談があった場合、それを判断してさしあげることは可能です。ところが最近、そういう相談のなかで、卒業論文や研究計画書が私の指導可能領域に合致していないわけではないけれど、レベルの点で問題のあるケースが目立ってきています。

慶應義塾では、少なくとも商学部では、学部時代から理論と実証の重要性を学び、学術論文を執筆する訓練がなされるわけですが、他大学では必ずしもそうとは限らないようです。実際、ビジネスプラン提案型の学生論文が流行しており、長編の学術論文を学生に書かせることをやめてしまった大学もあると聞きます。そのせいもあって、単に現状を記述したり、無根拠に将来の展望を述べたりするだけの自称「論文」の論説が提出されるケースが目立っているのです。

ですが、大学院に進学したいなら、それではいけません。直感力も重要ですが、論理を組み立てたり経験世

界に照らして分析したりするための道具立てや、学術論文を執筆する際の作法を身につけたり、そもそも正確かつ明瞭な日本語ないし英語で迅速に論文を書き上げる訓練をしたりすることが必要です。無事に入試に合格したら、入学までの期間、慶應義塾の指導教授がそうした指導を引き受けることも可能でしょうが、大学院入試に臨む前には是非、所属大学の先生方に特別な指導を仰ぐなどして、そうした訓練を積んでいただければと思います。

▲TOP

■ 大学院は研究教育機関での研究者を明確に志す人だけが目指す時代ではないかと思います。学部を卒業するに際して民間への就職を前提に進学を検討する人、将来を民間か研究者かと決めかねている人、社会人を辞めて大学院へ転進し、実業の世界に戻る人など、進学を志す人は多様化していると思います。進学を思い悩む人に何かアドバイスをお聞かせください。

そうですね。大学生や社会人の方々がどれだけ実感されているか定かではありませんが、高校から大学へと進学し、さらに、教養課程から専門課程へと進級していくにつれて、既存の知識を習得する活動から新しい知識を探究する活動へと、研究教育活動の重みづけが変わっていったはずですが、同じように、大学から大学院へ、修士課程から博士課程へとさらに学歴を積み上げると、知識探究活動への重みづけが一層増していきます。大学院に在籍して研究活動を行うということは、最先端の知識を身に付けるだけでなく、その先にあるはずの知識を探ろうとする営みを意味します。この営みによって、知る喜びを伴って心豊かな人間を形成するのが、大学院に進学することの最大の意義だと、私は考えています。

そうした大学院教育の意義を十分に享受することのできる、知に対して旺盛な探究心を持つ方々は、大学院の課程を修了した後も大学に居残り、その身を科学的知識の探究に捧げるのがふさわしいのではないかと感じます。とは言っても、私もそうであったように、最初から自分にはそれが適職だという信念をもって悩まず進学する人は稀かもしれませんし、また、課程修了後、研究職ではなく一般企業に就職することになったとしても、そのときは、豊富な知識と探究心をともなって、組織ひいては社会を先導する逸材として貢献できるはずです。課程修了後に一般企業で活躍している大学院生は、ご指摘のとおり非常に多くなっていますが、この傾向は社会の高質化のために歓迎すべきことだと思います。

他方、はじめから一般企業への就職を希望して大学院に入学される方にとって、大学院で教わった知識は課程修了後にどれだけ一般企業の実務で活用できるだろうか、大学院進学に伴って得られる学歴は、どれだけ将来のキャリアアップに貢献するだろうか、逆に、年齢を浪費するだけで大学院生は企業に求められていないのではないだろうか、といった悩みに陥るのはよく解りますし、それらは慎重に検討すべき問題です。ですが、進学を決定したり断念したりする際、大学院で得られる知識や学歴だけを、進学に伴う時間的コストや将来へのリスクと秤にかけて、目先の損得勘定で判断することは、実につまらないことだと思います。

その自然現象や社会現象や人間行動はなぜ生じたんだろうか、解き明かしたいな、といった具合に思える魅力的な研究課題と巡り逢い、それを損得抜きにひたむきに探究するためにこそ、大学院に進学いただくことが肝要ではないかと思います。そうした純粋で科学的な探究を通じて研ぎ澄まされる知性と感性こそが、どんな進路を選択するにせよ、課程修了後の人生を豊かにすると感じるからです。

▲TOP

小野 晃典(おの あきのり) 商学部准教授(商学研究科委員)

1995年慶應義塾大学商学部卒業、1997年同大学院商学研究科修士課程修了、2000年同博士課程修了。

商学博士。助手、専任講師、助教授を経て2007年より准教授。2009年より商学研究科委員。

その間、2005年から2008年にかけて、サンノゼ州立大学経営大学院、カリフォルニア大学パークレー校ハース経営大学院、

北京大学光華管理学院、ミシシッピ大学経営大学院の客員研究員を歴任。専門はマーケティング論。

小野晃典准教授ホームページ：<http://www.fbc.keio.ac.jp/~akinori/>

小野晃典研究会ホームページ：<http://news.fbc.keio.ac.jp/~onosemi/>

